

➤ シンポジウム 1 (公募・一部指定)

※国際セッション

「良悪性鑑別困難な胆嚢疾患の診断と治療」

司会： 中郡 聡夫 (東海大学医学部消化器外科)
糸井 隆夫 (東京医科大学消化器内科)

画像診断が進歩した今日でも日常診療においてしばしば良悪性の鑑別が困難な胆嚢壁肥厚や隆起性病変に遭遇する。この大きな要因として胆嚢は胆道に含まれる臓器の中でも最もアプローチが困難な場所であり、容易に組織生検や細胞診が行えないことがある。しかしこうした鑑別診断はその後の治療戦略に大きな影響を与えるためより正確な診断が求められることは論を俟たない。特に外科的治療が選択される場合には開腹術なのか腹腔鏡下で良いのか、胆嚢全層切除なのか、拡大胆嚢切除なのか議論の余地がある。特に、胆嚢病変にとどまらず、肝門部胆管狭窄を呈するような場合には良悪性の鑑別は重要である。本セッションでは良悪性鑑別が困難な胆嚢疾患に対して数あるモダリティを用いてどこまで診断するのか、逆に外科としてはどこまでの術前診断を望むのか、更には術前診断に基づいてどのような外科治療を選択するのかなど科の垣根を超えたディスカッションを行いたい。多数の演題応募を期待する。

➤ シンポジウム 2 (公募・一部指定)

「硬化性胆管炎を巡る諸問題」

司会： 廣岡 芳樹 (藤田医科大学肝胆膵内科)
田妻 進 (JA 尾道総合病院病院長)

硬化性胆管炎には原発性硬化性胆管炎 (PSC)、IgG4 関連硬化性胆管炎 (IgG4-SC)、発症の原因が明らかな 2 次性硬化性胆管炎が含まれる。発症年齢に二峰性を認める PSC では若年層と高齢層で臨床像が異なっており、この臨床像の違いの中には、炎症性腸疾患合併の有無に関連する腸内細菌叢の異常などこれまでと異なる視点での検討も始まっている。IgG4-SC に関しては長期予後、胆管癌との関連などは今後の課題である。2 次性硬化性胆管炎の中では腫瘍による閉塞性胆管炎、手術などに関係する虚血性胆管炎、感染性胆管炎、特殊な全身疾患に伴う浸潤性胆管炎など様々な病態が存在する。本シンポジウムでは、鑑別診断の実際と工夫 (画像診断、病理診断、癌化の診断、各種バイオマーカーの意義など)、治療、特に外科の介入が必要になる段階と介入プロセス、各種硬化性胆管炎の予後などに関して現時点でのコンセンサスを得ることを目的とする。多くの演題応募を期待する。

➤ シンポジウム 3 (公募・一部指定)

「胆道疾患に対する腹腔鏡下手術の最前線」

司会： 堀口 明彦 (藤田医科大学医学部消化器外科学ばんだね病院)
若井 俊文 (新潟大学大学院医歯学総合研究科消化器・一般外科学分野)

胆道領域において、胆石症・総胆管拡張症・胆道閉鎖症といった良性胆道疾患に対する腹腔鏡下手術はその安全性・有効性が確立されており、現在保険収載され全国的に普及している。その一方で、近年の腹腔鏡下手術の技術の進歩に伴い、高難度技術を必要とする悪性胆道疾患に対する腹腔鏡下手術の報告も国内外より散見されてきているものの、その安全性・有効性はいまだ確立されておらず、保険収載には至っていない。腹腔鏡下手術の安全性が求められるなかで、将来的な保険収載を見据えて悪性胆道疾患に対する腹腔鏡下手術の適応を拡大していくためにも、胆道疾患に対する腹腔鏡下手術の課題を明らかにする必要がある。本セッションでは、胆道疾患に対する腹腔鏡下手術における各施設の取り組みを発表していただくとともに、ロボット支援下手術も見据えた将来展望を議論していただきたい。